

# 『源氏物語』にみる「梅壺」

植田恭代

## 要旨

『源氏物語』にみられるさまざまな後宮の殿舎は、単に宮廷の風景としてあるのではなく、物語世界独自の場として描かれている。そのうち、淑景舎⇨桐壺、飛香舎⇨藤壺については、これまでに考察を試みた。本稿では、それらをふまえて、凝華舎⇨梅壺の場合について検討してみる。

凝華舎は、物語中では「梅壺」と表されている。物語にみられる「梅壺」には、弘徽殿大后の局、梅壺女御という呼称から明らかになるその居所、明石中宮腹の二の宮の御曹司という、三つの場がある。それらの描写は、一見、唐突に出てくるように感じられるが、『源氏物語』の殿舎の使われ方を思い起こしても、やはり物語の側の要請から、描かれるとみる方が自然であろう。前稿前々稿で検討してきたように、史実における後宮の殿舎は、男性たちにも使用される場である。凝華舎は東宮と関わりが深く、儀式の場ともなる。一方、「梅壺女御」と呼ばれた詮子の存在感も強く漂う場であった。そうした史実からのイメージを見据えつつ、物語世界の人々が実際に住んだ場であることを考えてみると、物語世界の梅壺も、それぞれの人物たちをとりまく縁により所有され、政権にも見合う場として想定されていると考えられる。

## はじめに

『源氏物語』において、後宮の殿舎は物語の重要な場のひとつである。もちろん、それはこの物語が、宮廷社会に生きる人々を描くからであるが、しかし、平安時代の物語すべてが宮廷を描くというわけではない。現在みることのできる物語でも、たとえば『落窪物語』には、宮中の様子は描かれてはおらず、いわゆる散逸物語まで視野に含めるならば、宮廷の描かれない物語は、さらにふえるであろう。そうした事情を見据えて『源氏物語』を考えてみると、宮中の様子が描かれ、殿舎がその重要な舞台となるのは、単に平安時代の作品だからということではなく、この物語の特質と関わることも見得るのである。

後宮の殿舎が物語という虚構世界に汲み上げられたとき、そこには、当時の宮中の生活の反映だけにとどまらない、物語世界独自の後宮のありかたが形象されてくる。『源氏物語』における殿舎の様相の一端を、桐壺と呼ばれる淑景舎、藤壺と称される飛香舎について、すでに検討してきた<sup>(1)</sup>。桐壺には、後宮殿舎が直廬としても用いられる実態を背景に、淑景舎女御と呼ばれた原子のイメージを揺曳させながら、かつての悲劇の拠点を光源氏の栄華栄耀構築の足場とする物語の方法があり、藤壺の場合は、九条家の繁栄を導いた村上帝中宮安子のイメージが強く漂うなかで、桐壺朝下のイメージを貫く場として設定されている。そこに、宮廷社会の実態をこえた、物語世界の桐壺や藤壺という場が、浮かび上がってくる。物語に描かれるこうした殿舎は、物語世界を生きる登場人

物たちが実際に住み、使用する場として設定されているはずである。物語という虚構世界ながら、しかし、その世界を確実に生きる人たちの生の場であることを、念頭におかねばならない。物語世界の場としての息づかいを重んじ、引き続き考察してみる必要がある。

平安時代の宮廷の構造は、『宮城図』や『大内裏図考証』によって復元推定が試みられ<sup>(2)</sup>、現代でも、辞書類の付録などでそれらに根ざす見取り図が広く流布している。これらの図が、平安時代の内裏の姿と断定することは難しく、慎重であるべきだが、前稿でも述べたとおり、『宮城図』が国充指図<sup>(3)</sup>や儀式指図としての性格を持つことを考慮するならば、そこにひとつの典型としての内裏のありかたを見とることができ。平安時代の内裏の歴史を顧みれば、天徳四(九六〇)年の内裏炎上以来、内裏は頻繁に炎上しているわけであり<sup>(3)</sup>、決して不変の殿舎ではあり得なかった。むしろ、平安時代中期になれば、度重なる火災により、炎上と造営を繰り返すのが、内裏のイメージと言っても過言ではあるまい。さらに、焼失にともなう造営中の仮住まいとして、里内裏の存在もあり、必ずしも内裏が帝の居所ではなかったという事情もある。

これまでの考察では、物語に描かれる殿舎を当時の内裏の実状に鑑みて、『源氏物語』が炎上と造営を繰り返す内裏の実態を反映するのではなく、理想的な典型としての内裏を前提とすると考える立場にたつて、物語世界の殿舎の担う意味を探ってきた。本稿においても、基本的な立場は同様である。そのうえで、これまでとりあげていない他の殿舎について、検討してみることにはしたい。『源氏物語』では、物語の展開から

桐壺や藤壺あるいは弘徽殿が注目されるが、物語世界で居住もしくは使用された場として、後宮五舎を見渡して、広くながめてみるべきである。ここでは、いままで、十分に検討を加えてはいない、梅壺の別称をもつ凝華舎に光を当てて、他の殿舎にも目を向けつつ、考えていくことにする。

### 一、物語の梅壺

凝華舎を考えていくために、まず、殿舎じたいを確認することから始めていきたい。

前述の『宮城図』や『大内裏図証考証』などから確認される後宮は、七殿五舎と呼ばれる。それらを改めてあげてみるならば、まず中央に貞観殿、承香殿、登花殿、弘徽殿があり、その外側を舎と呼ばれる建物が囲む。五舎をその通称とともに示すと、東側には北から、淑景舎⇨桐壺⇨昭陽舎⇨梨壺があり、西側には同じく北から、襲芳舎⇨雷壺、凝花舎⇨梅壺、飛香舎⇨藤壺がある。しかし、七殿の場合と同様、これらのすべてが物語に描かれるわけではない。その詳しい理由の断定は難しいが、五舎のうち二舎については、「凝花舎飛香一舎不載弘仁九年勅文爰知後代所造也其年未詳」という注記があり、少なくとも、飛香舎と凝華舎は後世にできた建物と推定される。物語世界の殿舎のあり方も、内裏の建造物が一度に完成したものではないことと、何らかの関わりがあるのであろうか。また、五舎の名称を見ても、後宮殿舎がひとしなみに造られ命名されてはいないことは、想像に難くない。「凝華（花）」は『文華秀

麗集』の詩にあり、一方、漢語としての「淑景」は和漢の詩に認められ、また、昭陽舎は中国の漢の時代に実在した殿舎名であり、『文華秀麗集』をはじめ、日本の漢詩にもその殿舎名が詠まれている。<sup>(1)</sup> その命名の差からも、内裏の舎が一次的にできたものでないことは、ほぼ間違いないさそうである。日本の宮城は古代中国の宮城に准えて作られたとされるが、唐風そのままの模倣ではなく、平安京は八世紀末から九世紀の日本の事情が色濃く反映していると考えるべきであろう。そのなかで飛香舎や凝華舎は、宮城成立当時より下った時代との関わりが深いと思われる。では、こうした殿舎は、物語にはどのように取り込まれているのだろうか。梅壺としては『伊勢物語』百二十一一段に、男が梅壺から雨に濡れて出てくる人に歌を詠む話があり、『枕草子』「かへる年の廿日」の段には中宮が職の御曹司にお出かけになったとき、お供をせずに梅壺に残ったことなどがみられるが、作り物語で現在確認できる後宮の殿舎を描く早い時期の作品は、『うつほ物語』である。ここでは、朱雀帝の仁寿殿女御、嵯峨院の承香殿女御などがおり、女御の居所としてこれらの殿舎があることがわかる。物語における舎の名称は、「壺」という通称で出てくることが多く、『うつほ物語』前半の求婚譚の中心であるあて宮は、朱雀朝の春宮に入内して「藤壺」と呼ばれ、飛香舎を居所とし、同じ春宮に梨壺の女御もおり、その居所に由来する夫人たちの呼称として描かれている。この春宮が即位して今上帝となると、麗景殿女御、登華殿女御、宣耀殿女御などが登場する。『うつほ物語』の舎としては、ほかに梅壺がみられるが、これは嵯峨院の更衣で御息所と呼ばれる女性

の居所であり、その梅壺御息所は忠こそとも親しい仲として描かれ、その出奔後は、兼雅の妻妾のひとりともなる。新編日本古典文学全集の「忠こそ」巻の注に「多情な妃として人物造型されたか」と記す。春宮女御の居所である藤壺や梨壺とは、趣が違っている。

翻って『源氏物語』を見渡してみると、『うつほ物語』に登場した仁寿殿はみえず、新たに弘徽殿がみえる。こうした違いは、それぞれの物語の成立した時期を反映すると考えるばかりでなく、むしろ、それぞれの物語の志向するところの違いとみる方が妥当であろうか。舎としては、『うつほ物語』に描かれなかった桐壺が物語最初の巻名ともなり、冒頭から破格の寵愛を受けた更衣の居所として強調されている。『うつほ物語』と重なるのは、藤壺、梅壺、梨壺であり、襲芳舎はともに描かれない。襲芳舎がどちらの物語にも描かれないのは、他の四舎とは違う通称にうかがえるように、命名の由来にもなる庭の植物ではなく、落雷に及ぶ連想があり、物語の場としてはあまり好まれなかったせいであろうか。

一方の共通する四舎では、藤壺は、『源氏物語』でも光源氏とかかわる重要な女性の居所であり、以後の物語でも呼び返されるが、東宮ではなく、帝の妃の場である点が違う。梨壺は、『源氏物語』では濔標巻の譲位後、冷泉帝の治世下における東宮の在所として一箇所のみ登場し、政権復帰を果たした光源氏が淑景舎を足場として後見する叙述に続いて描かれる。これは東宮と東宮女御の居所という違いである。梅壺は、光源氏の後見によって立后する女御の居所として突然登場し、『うつほ物語』の梅壺が帝以外の男性たちとも関わる女性を表すのとは、まったく

印象が違う。

では、『源氏物語』において、梅壺という場はどのように描かれているのであろうか。まず、本文の描写を、確認していく。『源氏物語』のなかで、梅壺が初めて話題になるのは、桐壺帝崩御後の、弘徽殿太后の居場所が描かれるくだりである。

后は、里がちにおはしまいて、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。登花殿の埋れたりつるに、晴れ晴れしうなりて、女房なども数知らず集ひ参りて、いまめかしうはなやぎたまへど、御心の中は、思ひの外なりしことどもを、忘れがたく嘆きたまふ。 賢木巻一〇一頁<sup>9)</sup>

『源氏物語』で「梅壺」といえば、六条御息所の娘が斎宮を経て光源氏の後見により入内したときの、「梅壺女御」の印象が強いが、実は、それ以前に、すでに「梅壺」という場は描かれている。ここで、弘徽殿太后は、故桐壺帝譲位にともない、宮中の弘徽殿からは離れて、里邸である右大臣の邸にすることが多いと描かれている。物語の記述では、譲位後藤壺が院の御所にいる桐壺院によりそって暮らすのを、弘徽殿太后は快く思っておらず、「ただ人のやうにて添ひおはしますを、今后は心やましう思すにや、内裏にのみさぶらひたまへば」(葵巻一七頁)とあり、弘徽殿太后は宮中に常駐するかのごとき暮らしぶりであったという。そこで、梅壺を宮中参内時の局として用いているのである。譲位後の上皇御所である後院とともに暮らす藤壺に対し、弘徽殿太后は基本的には里邸におり、宮中参内の際には、やはり足場として梅壺を得ているのであ

る。葵巻冒頭から梅壺を用いたのか、弘徽殿を引き続き用いて朧月夜が尚侍になった時点で、足場を梅壺に移したのかは定かではないが、『大和物語』初段の内裏との別離を詠んだ、伊勢の御の贈答歌からも明らかのように、讓位後そのまま在位中の殿舎にすることは考えにくい。またここでの表現も「したれば」と、存続を表わす助動詞「たり」を用いているところから、尚侍就任以前から梅壺を用いていた可能性もうかがえる。

その後、梅壺がみられるのは、光源氏が都に召還されて栄華を極めていくさなかの絵合巻であり、そこで光源氏が後見する六条御息所の遺児梅壺女御と内大臣（頭中将）の娘弘徽殿女御の立后争いを描く場面である。

物語絵はこまやかにつかしきさまさるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、弘徽殿は、そのころ世にめぐらしくをかしきかぎりを選り描かせたまへれば、うち見る目のいまめかしき華やかさは、いとこよなくまされり。 絵合巻三七九頁

物語絵を合わせる遊戯にこと寄せた光源氏方と内大臣方の権力争いが描かれ、光源氏方を代表する女御は、「梅壺」と言われるのである。その呼称は繰り返し用いられる。

梅壺の御方には、平典侍、侍従内侍、少々命婦、右には大式典侍、中将命婦、兵衛命婦を、ただ今は心にくき有職どもにて、心々に争ふ口つきどもをかしと聞こしめして、まづ、物語出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせて争ふ。 絵合巻三八〇頁

……中納言は人にも見せて、わりなき窓をあけて描かせたまひけるを、院にもかかること聞かせたまひて、梅壺に御絵ども奉らせたまへり。 絵合巻三三八三頁

ここでは「梅壺」「梅壺の御方」と、その居所に由来する呼称が置みかけられ、強調されていく。勝利をおさめるのは光源氏方で、梅壺女御は少女巻に至り、立后する。

源氏のうちしきり后にゐたまはんこと、世の人ゆるしきこえず、弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかなど、内々に、こなたかなたに心寄せきこゆる人々、おぼつかながりきこゆ。兵部卿宮と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむごとなき御おぼえにておはする、御むすめ本意ありて参りたまへり。同じごと王女御にてさぶらひたまふを、同じくは、御母方にて親しくおはすべきにこそ、母后のおはしまさぬ御かはりの後見にとことよせて似つかはしかるべくと、とりどりに思し争ひたれど、なほ梅壺のたまひぬ。 少女巻三〇〜三一頁

「源氏のうちしきり后に」とあるように、『源氏物語』では藤氏以外からの立后が続き、この女御もその系譜を支えるひとりである。つまり、藤氏に対するそれ以外の血筋を表すとみられる「源氏」方を象徴する後の居所として、梅壺が描かれる。ここで、「梅壺」が唐突なまでに登場し、呼称として重ねられていくのは、「梅壺」をその晴れの場として強調する必要が物語の側にあったからに違いない。その呼称としての「梅

壺」は、ここで強調されて以降、特記されることはなく、私たちも、通常、この中宮を秋好中宮と呼び慣わしている。それは、同じ少女巻巻末

で六条院が造宮され、この中宮も秋の町を里邸とすることになるからである。しかし、改めて顧みれば、「秋好中宮」という呼称じたいが、物語内にみられるわけではなかった。物語内の中宮の呼称としては、「中宮」や「后」である。六条院完成以後、中宮は春の町の女主人紫上と對比され、胡蝶巻では春秋優劣論も繰り広げられ、母故六条御息所に由来する秋のイメージが強まる。それは、何より物語世界が六条院によりその視点から描かれることに起因していよう。今に伝わる古系図のいずれをみても、この女性の呼称は「秋好中宮」である。<sup>(10)</sup>しかし、「秋好」と季節のイメージで呼び慣わされても、宮中での居所は当然存在するはずである。物語の展開からそれを考えていくと、梅壺以外にはあり得ない。物語の展開をたどると、少女巻から冷泉帝讓位が描かれる若菜下巻まで、物語の年立てによれば約十数年間、梅壺が中宮居所であったと考えられる。

その後、第二部の物語では、梅壺は影を潜めるが、第三部に入り、光源氏亡き後の物語世界の動向が描かれるなかで、ふたたび「梅壺」が登場している。明石中宮腹の子どもたちを紹介する部分である。

女一の宮は、六条院南の町の東の対を、その世の御しつらひあらた  
めずおはしまして、朝夕に恋ひしのびきこえたまふ。二の宮も、同じ殿の寝殿を時々の御休み所にしたまひて、梅壺を御曹司にしたまひて、右の大殿の中姫君を得たてまつりたまへり。次の坊がねにて、

いとおぼえことに重々しう、人柄もすくよかになんものしたまひける。  
句宮巻一八頁

明石中宮腹の二の宮は、六条院春の町の寝殿を時々の休みどころとするが、御曹司は「梅壺」である。この時の春宮は一の宮であり、三の宮である句宮は御法巻での紫上の遺言をうけて二条院に住まう。評判も高い坊がねと紹介される二の宮は、「梅壺」を居所として、夕霧の娘中姫君を得て暮らしている。

こうしてみると、『源氏物語』の梅壺は、大きく分けて三つの場として描かれている。ひとつには、皇太后が讓位後も宮中に参内するときの場である。このなかでは、二番目の梅壺女御の居所の印象が強いが、それ以外にも、物語世界に梅壺が想定されていたのは見逃せない。さらに、三つの「梅壺」という場合は、それぞれの場の所有の経緯が丁寧に説明されるのではなく、どれも唐突に出てくる。こうした物語世界の三つの梅壺を、どのように解釈していったらよいのだろうか。物語の梅壺をとりまく諸事情の検討に加えて、梅壺という場の性格をさぐりつつ、以下、物語世界の梅壺を考えていく。

## 二、史実のなかの梅壺

では、この「梅壺」は実在の殿舎としてはどうであったのだろうか。次に、史実をたどりつつ「梅壺」の性格を考えてみたい。

『和名類聚抄』には、「凝華舎 在飛香舎北 半倍豆保」とあり、<sup>(11)</sup>他の舎と

ともに、すでに、「むべつば(むめつば)」の呼称があったことは明らかである。古記録では、中国の殿舎名のあり方に由来する「凝華舎」の名称で記されることが多く、それは他の四舎にも共通する傾向である。

史実における凝華舎の記述をたどりみると、凝華舎が東宮との関わり深い場であることに気づく。それは、東宮の在所の研究からも指摘されており、平安時代初期から中期にかけての東宮の居所についての考察によると、平安時代初期には、皇太子は立坊後ほどなく東宮に入るのが慣例であり、その場所は内裏の東側にある西前坊であった。しかし、醍醐朝の保明親王薨去があり、そのあたりから事情が変わり、続く慶頼王は職曹司を在所としたと推定されるが、夭折したため、東宮の在所は後宮の殿舎にとってかわられるようになったという<sup>(13)</sup>。こうした東宮のかかわりは、凝華舎に焦点を定める立場から顧みても、凝華舎の性格のひとつとして確認される。ここで、しばらく、それをたどりみていく。

凝華舎に関する記述は、醍醐朝あたりから、散見するようになる。

\* 以田芸可任济恩寺権別当之事、仰元方、東宮暫遷凝華舎、為行神事也、  
『貞信公記抄』延長三(九二五)年十一月四日条<sup>(14)</sup>

延長元年三月の保明親王薨去の後、四月に保明の子慶頼王が立太子するが、延長三年六月には薨去し、同年十月に立太子するのが、この記述の東宮である寛明親王、後の朱雀帝である。ここでは、神事のため東宮が凝華舎に遷っている。それでは、この時の東宮の在所はどこであったのかという問題にゆきあたる。寛明親王は幼少のため母のいる弘徽殿に入ったことが『醍醐天皇御記』や『日本紀略』などから知られ、この記

述は一時的に神事のために凝華舎に移ったとみられよう。

では朱雀の東宮時代の凝華舎はどうであったのか。

\* 東宮御仏名始行、凝華舎、仍参入、

『貞信公記抄』延長三年閏十二月廿一日条  
ここにいう東宮は寛明親王であり、御仏名を凝華舎で行っている。そこに忠平が行くのは、寛明親王の母穩子が忠平の同母妹であり、忠平は、のちに寛明親王の摂政までつとめているほどの親密な関係であったからであろう。

さらに、凝華舎の記述をたどってみたい。寛明親王は延長八(九三〇)年九月に即位し朱雀天皇となるが、その朱雀朝における凝華舎はどのように用いられていたか。

\* 梅壺定季御読経請僧、有官奏、左中弁、

『貞信公記抄』承平元(九三一)年二月十六日条

\* 除目議、梅壺始行、依予病、此儀于今延引、

『貞信公記抄』承平元年三月十一日条

\* 御禊・大嘗会等料可別納事、召左中弁梅壺給宣旨、

『貞信公記抄』承平元年十一月十七日条

いずれも承平元年の記述であり、二月には、凝華舎で季の御読経が行われ、翌三月には、除目が行われている。また、十一月には、左中弁紀淑光を召して宣旨が出されている。ここで凝華舎は、さまざまな儀式の場となっている。延長八年の寛明親王即位から天慶七年に成明親王が皇太子となるまでの間は皇太子が不在であり、これら『貞信公記』の承平年

間の記述は、凝華舎が東宮の在所であったことを証すとは言えないが、凝華舎が公的な儀式の場であったことを伝えている。後宮といえは宮中における女性の局をさすという、仮名物語などからの通行の概念があるが、これらの史料から、そうした概念で殿舎を括ることに慎重でなければならぬ、場のありかたをみる事ができる。

では、朱雀朝に東宮が立ってからは、どうであろうか。

\* 東宮御荷前事今日同被行、其儀凝華舎南庭所司立輕幄、設御座東面、  
『九條殿記』天慶七（九四四）年閏十二月二日条

ここの東宮は、天慶七年四月に皇太弟となった成明親王、のちの村上天皇である。その成明親王は、荷前を凝華舎で行っている。

\* 今上於宜陽殿拜舞云々、皇帝御装束一襲・御笏等、差掌侍被奉親王、次有上表事、以大臣被示不許由、内豎參梅壺奏時、殿上侍臣・官官等、宣□□不能候殿上、雖無宣旨可候之由、下官蒙仰示仰云々、

『九曆逸文』天慶九（九四六）年四月廿日条  
これは、凝華舎ではなく梅壺と記されている稀な記述だが、朱雀帝の讓位にともなう成明親王の即位にあたり、上表の事が記されるくだり、内豎（豎）が梅壺に行く。成明親王の東宮時代は凝華舎を在所としたと考えられる。

こうした凝華舎に関する諸記録のなかで注目されるのは、村上朝の立太子に関する記述である。村上帝の即位は天慶九（九四六）年四月だが、天曆四（九五〇）年七月には、五月に安子の産んだばかりの憲平親王が

立太子する。『栄花物語』「月の宴」には、大納言元方の娘の産んだ広平親王が春宮候補として期待されていたが、右大臣師輔娘の安子に皇子が産まれ、七月には憲平親王が立太子する経緯を伝える。憲平親王は、後の冷泉帝である。

\* 召茂樹令進勘文、来月廿三日、戊子尤吉者、午剋参内、令伊尹奏之、仰云、以件日可遂行之、抑先例立皇太子之後不経幾日入於東宮若職曹司、而東宮凶事之後、也及数十年、荒涼也甚、至于職者亦有所憚、延喜次皇太子於東職大也 尋求宮中便所、修造之間、若経数月歟、恐事之乖先例、奏云、如此之事、隨便宜可被行者也、在昔東宮及職曹司、無有破損、仍早移入也、当今此兩扱雜舎顛倒、所残不幾、又諸司之間忽無其処、加以秋三月王相在西、皇子居処当宮城之東扱便処而三ヶ月間加修理、移徒尤宜歟、仰云、所申之宜、非無其理、然而庶事依先例可行者也、若数月在里第者、遺後代之謗歟、

『九曆逸文』天曆四年六月廿六日条  
ここで、憲平親王の立太子後に入る在所が、村上帝と師輔との間で問題とされている。村上帝は、先例によるならば、立太子後日をおかずに「東宮若職（職）曹司」に入るべきであり、「東宮」の凶事の後数十年、そこは荒れ果てており、「職曹司」も憚られるが、宮中に適切な場所を探して修理の期間は数ヶ月くらいかとし、先例と違えることを懸念している。それに対し師輔は、「東宮若職曹司」は現在荒廢しているため、「便扱」を選んで三ヶ月修理を加えた後、移ることを述べる。東宮の凶事とは、前述のとおり、延長元年の保明親王薨去をさす。保明親王は、

内裏東側にあった東宮を在所とした最後の親王であり、相次ぐ皇太子の凶事は、あの道真の怨霊への恐れと密接に結びついていたようである。<sup>(16)</sup>

東宮の在所について、続くやりとりが記されている。

\*如先日仰者、東宮是皇太子居処也、何依一度之凶事、長棄其処、

宜加修造令住彼宮者、仰旨是尤道理也、非可敢申、然而延喜初太

子成人之後、於彼宮俄天、其後破壊尤盛、殆如曠野、今偏論道理、

令住幼少之皇子非無所畏、延長・天慶之例、以凝華舎為皇太子宿

廬、至于此而太子者、已后腹親王也、非可敢准因、先例貞觀之代

右大臣良相卿給曹司於中重、臣下已候陣中、然則此度太子以桂芳

房欲為宿廬、宜量便宜、奏此由、仰云、事は宜矣、可隨行者云々、

『九曆逸文』天曆四年七月十一日条

頭弁の藤原有相が、皇太子は「東宮」に入るべきであり、たった一度の

凶事によってやめるべきではないという帝の意向を述べるが、師輔は、

「東宮」は荒廃がひどく広野のようであるとし、延長・天慶の例として

は凝華舎が皇太子の宿廬であったが后腹の親王であり、憲平親王には桂

芳坊を宿廬とすることを主張している。延長・天慶の例とは、穩子腹の

朱雀・村上両帝の東宮時代であり、凝華舎を用いていたのは前にも見た

とおりだが、これによれば、それは「宿廬」と表されている。この時、

師輔は、凝華舎を延長・天慶の東宮の宿廬とみなしていたことになる。

保明親王薨去ののち、在所としての「東宮」は事情がかわり、天曆年間

には、凝華舎と東宮の関わりが時代の権力者に意識されていたことがう

かがえよう。

内裏の北側に位置する桂芳房がこの後修理され、十月二十二日に憲平親王はそこに入るが、さらにその後、凝華舎に移っている記述もみられる。<sup>(17)</sup>

\*八年四月廿三日丙寅。移座凝華舎。

『日本紀略』冷泉院 踐祚前抄記

ここには、天曆八（九五四）年四月廿三日に移っていたと記され、同

じ踐祚前抄記の天曆四年のくだりには「入桂芳坊」ともあることから、

四年後の八月に、桂芳房から凝華舎に移ったと考えられる。さらに、続

く踐祚前抄記康保四（九六七）年五月廿五日の村上天皇崩御に続く記述

に、「奉璽劔於皇太子直曹襲芳舎。或云凝華舎。」ともあり、襲芳舎が春宮の

居所として用いられたという本文の異伝として「凝華舎」も記され、

『日本紀略』同日条には「皇太子受天祚於凝華舎」とある。襲芳舎とす

れば、天曆八年以降康保四年以前のどこかの時点で、春宮が凝華舎から

移ったことになるが、村上朝では、東宮の居所として凝華舎が用いら

れていた可能性を示す記述がみられる。

\*天曆十年四月十九日辛巳、於凝華舎始読御注孝経、八、

『平範記』久寿二（一一五五）年十二月 「御書始例」冷泉院

\*今夜。東宮自左近衛府還御凝華舎。

『日本紀略』康保元（九六四）年七月九日条

\*東宮於凝華舎修法。以内供奉長勇法師為阿闍梨。

『村上天皇御記』康保四（九六七）年三月四日条

\*始自此日。於凝華舎。阿闍梨長燭。余慶等修不断経。為東宮煩也。

『村上天皇御記』同年三月十一日条

『平範記』の引用部分と同日の記述が『西宮記』にあり、そこに記されていない場所がこれによってわかる。これら四例は、いずれも憲平親王についての記述で、凝華（花）舎で孝経を講ぜさせたり、病気のため修法をさせたりしている。凝華舎が居所であったという異伝を否定することはできない。むしろ、村上朝において、凝華舎は、ほぼ、延長・天慶を引き継ぐ、東宮の支配する空間であったと考えられる史料である。

その後の凝華舎を確認しておく。冷泉朝では、安和二（九六九）年二月に昭陽舎への放火があり、後の円融帝である東宮守平親王が昭陽舎から凝華舎に移っている。

\*東宮自昭陽舎移凝華舎。

『日本紀略』安和二（九六九）年三月十一日条  
守平親王は、もともと昭陽舎を居所として、そこにいらなくなつたため、凝華舎に移つたとみられる。冷泉朝における東宮の居所が当初から凝華舎ではなかったのは、憲平親王が当初凝華舎に入らなかつたことと関係するであろうか。

しかし、円融朝では、凝華舎が東宮師貞の居所となっている記述がみられる。

\*今夕。皇太子従一条第遷御于禁中凝華舎。

『日本紀略』安和二年十一月廿三日条

\*今日。皇太子従左近衛府入御凝華舎。

『日本紀略』天延三（九七五）年七月十三日条

八月に立太子した師貞親王が、十一月に一条第から凝華舎へ移り、その数年後の記述でも凝華舎を用いている。師貞親王は、昭陽舎も用いていたことが知られるが、凝華舎はその支配する空間としてあったとみられるのではないか。

そして、一条帝の東宮時代もやはり凝華舎であった。

\*今日。天皇従凝華舎遷御清涼殿。

『日本紀略』永延元（九八七）年二月十六日条

このように、凝華舎は東宮の在所とならない時も、その支配する空間としての性格はうかがえ、また、晴れの儀式などの場としても使われていた。醍醐朝の保明親王薨去を契機として東宮の御在所をとりまく事情が変わり、凝華舎は村上朝から東宮の在所としての性格を持ち、後代の東宮たちにも引き継がれていく。<sup>(18)</sup>

では、女性の居所としての凝華舎は、どうであったのか。凝華舎に関わりの深い女性として知られるのは、兼家の娘で東三条院となる詮子である。詮子は入内時から凝華舎を居所としている。

\*大納言藤原兼家卿息女初入掖庭。候梅壺。名詮子

『日本紀略』天元元（九七八）年八月十七日条

『栄花物語』「花山たづぬる中納言」にも、「東三条の女御は梅壺に住ませたまふ」とある。対立する兼通の娘皇子の突然の死を描く天元二（九七九）年の叙述では、「梅壺いみじう時めかせたまふ」や、世の人々の噂として「梅壺女御后にゐたまふべきぞ」など言ひののしる」などとみえる。立后するのではないかという評判の女御が梅壺女御であ

り、『栄花物語』では、詮子を「梅壺」「梅壺女御」で表し、永観二（九八四）年八月廿七日円融帝讓位にともない、立太子した懐仁親王は「東宮」には、梅壺の若宮みささとさせたまひぬ」と呼ばれている。梅壺女御の呼称は、仮名物語ばかりではなく、記録にも記され、直廬にしていたことがわかる。

\*右府・按察大納言為光・左大将朝光・参議佐理相率参入内、於梅壺上直廬有盃酒、 『小右記』 天元五（九八二）年正月三日条  
詮子以前に「梅壺」の呼称をもつ女御・更衣は、管見に入った限り見当たらず、のちの梅壺女御は『栄花物語』や『更級日記』にみられる教通の娘生子になる。それだけに、平安中期における女性の居所「梅壺」としては、やはり詮子のイメージが濃厚であったと考えられる。

以上、史実における凝華舎をたどりみてきた。史実における凝華舎としては、醍醐朝の保明親王薨去が凶事と受けとめられて後、延長・天慶頃から東宮の在所、もしくは支配する空間としての性格を持つようになった。さらに、円融朝に詮子が入内して凝華舎を居所としたことにより、梅壺すなわち詮子のイメージが濃厚となり、「梅壺女御」の呼称も定着してくるのである。

前稿においても考察してきたとおり、史実のなかの後宮殿舎は、入内した女性たちの居所であるばかりではなく、男性たちの直廬として用いられたり、行事の場となったりもする場である。<sup>(19)</sup>凝華舎も儀式のとり行われる場としても用いられ、東宮の在所および支配空間として用いられている。それらをもって、公的とまで言い切ることは難しいが、少なく

とも女性達の集う私的な空間だけではないことは、明らかであろう。

### 三、梅壺と梨壺

では、こうした史実の凝華舎をとりまく事情のなかで、『源氏物語』の物語世界に三つの梅壺が描かれることを、どのように考えることができるだろうか。

桐壺帝の聖代が醍醐朝のイメージと重なることを想起すれば、物語世界の凝華舎も、内裏東側の東宮御所が用いられていた時代ではなく、延長・天慶頃からの東宮と関わりのある場となつてからの凝華舎のイメージが色濃くなる。やはり、そうした共通理解としてのイメージを切り離すことはできない。賢木巻で弘徽殿太后が梅壺を宮中参内時の場所としていると描かれるのは、決して唐突なものではなく、弘徽殿太后が使用するにふさわしい理由が物語世界にあったからであろう。『源氏物語』の殿舎は、何らかのゆかりのある人々に受け継がれていく場合が多い。桐壺は、桐壺更衣から光源氏へ、さらに明石女御へと継承され、藤壺は、物語内の過去を引き寄せるかのように、あとの物語から藤壺中宮の異母妹の居所であった場を逆照射している。そうした事情を考えてみると、この梅壺もまた、弘徽殿太后に縁のある場所であったと推定してみることでできよう。太后が桐壺朝に使用していた弘徽殿の場も、妹の朧月夜に譲られており、梅壺も右大臣方の誰かが使用していたと考えられるが自然である。史実からのイメージによって補助線を引いてみるならば、物語世界においても、梅壺が東宮の支配空間として想定されていた可能性

は高い。葵巻の朱雀帝即位により東宮が立つが、これはのちの冷泉帝であり、右大臣方と敵対する東宮の在所を同時に使用するとは考えにくく、やはり朱雀帝の東宮時代の何らかの縁とみる方が妥当であろう。朱雀朝における東宮の支配空間であってもよさそうな場を、引き続き弘徽殿大后が使用する。右大臣に政権が移った時期、梅壺は右大臣方の支配空間としてあったとみられよう。

そもそも、朱雀帝や冷泉帝の東宮時代の在所がどこであったかは、明確にされていない。桐壺帝から今上帝に至るまで、物語世界の東宮の在所が描かれることじたい珍しく、唯一、描かれるのは、濔標巻の讓位後、冷泉朝下で光源氏が再び淑景舎を居所とすることに言及するくだりである。「梨壺に東宮はおはしませば、近隣の御心寄せに、何ごとも聞こえ通ひて、宮をも後見たてまつりたまふ」という、一文のみである。物語に描かれないという事実は、不明だからなのではなく、共通のイメージに支えられているからと考えられよう。そのうえで、梨壺と明記される一箇所を、常のこととみなすのか、特別のことであるからとみるのか、という問題がある。

史実における東宮の在所は、凝華舎だけではなく昭陽舎であったこともあり、どちらと断定することはできない。史実の梨壺も春宮の居所として用いられるが、常に在所であるとは限らないのである。前述の安和二年の昭陽舎放火により凝華舎へ移御する記事により、このとき昭陽舎が春宮御所であったことがわかるが、それが一貫するわけでもない。天曆五（九五二）年十月三十日には、梨壺に和歌所がおかれ、『万葉集』

の訓点読作業と『後撰集』の撰集を行う、いわば国家の文化事業の場となり、「梨壺の五人」が知られることになる。天慶九年から天曆二（九四八）年にかけて安子が梨壺を居所としており「梨壺女御」の呼称もあり、<sup>(20)</sup>天曆七（九五三）年に穩子が菊を植えさせ、同八年一月四日には穩子がここで崩御する。<sup>(21)</sup>こうした安子や穩子の記述から、梨壺が『後撰集』編纂の場となったことを「女性的契機」がはたらくとみなして、和歌所や『後撰集』の私的な性格を導く見方もあるが、<sup>(22)</sup>前節でみてきた舎の事情からしても、その判断には慎重でなければならぬであろう。また、『日本紀略』応和元（九六一）年十二月十七日条には「中宮東宮遷座内裏。中宮弘徽殿。東宮昭陽舎。或云。襲芳舎。」とあり、襲芳舎という揺れもみられるところである。康保三（九六六）年十一月には為平親王がここで高明の娘を娶っていることも知られ、<sup>(23)</sup>諸記録をみる限り、必ずしも昭陽舎が東宮の在所というわけではない。むしろ、長元・延久など後世になって東宮と関わる記述もふえてくる。<sup>(24)</sup>

こうした史実の側の梨壺をめぐる事情を考えれば、物語がここで、「梨壺」を出すのは、冷泉朝下の東宮の在所を梨壺と明確に定め、淑景舎を足場とする光源氏との親密さを強調するために他ならない。したがって、この時の梅壺は東宮の在所ではなく、居住者も明らかにされていない。それが、絵合巻で女御の居所となり、光源氏側の場として再浮上するのである。物語事情としては、東宮を光源氏が親密に後見する体制の成り行きとして、梅壺が光源氏方の女御の居所となっている。一節でみたように、女御は立后して秋好中宮となっても、梅壺をそのまま用

いていたはずであり、若菜下巻の讓位に至るまで、梅壺は、長い聖代を支える中宮の場として存在し続けていた。「梅壺女御」と繰り返し表されることには、兼通と兼家の確執を背景にもち「梅壺女御」と呼ばれた詮子の印象が揺曳していよう。もっとも、詮子が立后はできず一条天皇の母として道長との縁も深めながら権力を得ていくのに対し、梅壺女御は秋好中宮となり聖代を支える重要な位置にありながら、子孫に恵まれず冷泉帝の皇統断絶に至る。対照的な結末が際立たせられるところにこそ、物語世界独自の梅壺女御の造型がある。

東宮の支配空間という凝華舎の性格を見据えるとき、一見、唐突に登場する物語の三つの梅壺の場も、物語世界に内在する脈絡に導かれ、政権の移譲と密接に絡む物語展開と相俟って描かれていると考えられるのではない。右大臣方の支配空間であった場が、光源氏復権後、朱雀院の皇子である東宮と光源氏の親交により、光源氏方の支配下に入り、后がねの女御に所有され、冷泉帝聖代を支える重要な場として存続するのである。

第三部に至ると、梅壺は匂宮の兄にあたる二の宮が使用する。春宮である一の宮の在所は明かされず、一の宮の即位にともない立坊する二の宮が、六条院の寝殿を休みどころにしながら、梅壺を御曹司として所有し、夕霧の中姫君を迎えている。光源氏の栄華を支えると予言された御子三人のうち明石中宮と夕霧の子どもたちが梅壺を居所としており、光源氏の栄華を支えた子孫たちに、梅壺は継承される場なのである。

#### 四、物語史の梅壺

こうした梅壺は、その後物語においてどのような場として描かれているのだろうか。最後に、『源氏物語』以降の梅壺についてながめておきたい。

後期物語では、『浜松中納言物語』に梅壺がみられる。

さて、式部卿の宮は東宮うせ給ひぬれば、疑ひなき儲けの君に定まり給ふべきを……中略……七月ばかりよりは、内裏の御宿直所におはしませ給へば、まぎれさせ給ふべきかたなくて、やがて、清水より内裏におはしまして、御宿直所の梅壺に隠し据ゑさせ給ひて、女房などもみなさぶらへば、さやうにまぎらはして、とおぼすに……

『浜松中納言物語』巻第五  
疑いなき皇位継承者として東宮に立つはずの式部卿の宮が、帝に諫められ、七月頃から内裏の御宿直所におでましになるのでごまかすこともできず、吉野の姫君を御宿直所である梅壺に隠し据えて女房のようにみせかけておくことを考える場面である。ここで、梅壺は東宮になることが決まっている宮の、御宿直所として描かれている。『浜松中納言物語』に梅壺がみられるのは、この一箇所のみであり、入内した女性の居所ではなく、東宮の支配空間として設定されているのは明らかである。

『夜の寝覚』では、内大臣が御宿直所として梅壺を賜っている一例がある。

内の大殿も、やがてさぶらひたまひて、御宿直所は梅壺なれば、近

きほどにて、「もし、暗紛れのひまもや」と、内侍督の上りたまひぬるより、やがてさぶらひたまひて、うかがひたまへど、大納言たち、中納言、その子どもも、女房なども、立ち騒ぎ、ひまあるべうもあらず。

『夜の寢覚』巻三

これは、臣下の直廬としての梅壺である。後期物語における梅壺は、女性の居所というより、身分は異なるが、男性の支配空間であるという点で一致する。

以降の物語でも、「梅壺」は諸作品に多く描かれ、物語の場となり続けている。その描かれ方は一様ではないが、入内した女性の居所として描かれる例が大半である。たとえば、『とりかへばや物語』では、帝の女御である梅壺が登場しており、宰相中将がうらやむ設定であり、『小夜衣』では、帝が寵愛する美しい梅壺女御として描かれている。梅壺を居所とする女御の立后が明確にされているのは、『風に紅葉』で、大将に思いを寄せる梅壺女御がおり、その後立后している<sup>(25)</sup>。また、『秋霧』では、東宮に入内する忍ぶ草の姫君の居所として描かれる。ここでは、『源氏物語』『桐壺』巻を想起させるような語り口である。

御つぼね、むねつぼなり。

『秋霧』下

これは「むめつぼ」と思われ、あのよく知られた「御局は桐壺なり」の影響下にある一文とみられる。それぞれの殿舎固有のイメージを踏襲して描くというより、物語表現における後宮殿舎という場、あるいは後宮を示す語り口がパターン化していると、考えられよう。有名な一文の「桐壺」を入れ替えたような表現は、この『秋霧』だけではなく、他の

物語にもみられる。

御つぼねは梅つぼなり。

『石清水物語』上

御つぼねは梅つぼなり。

『夢の通ひ路物語』五

梅壺の固定的イメージよりも、桐壺更衣の悲恋物語の簡潔な名文が先にあり、形式化していったのではないだろうか。

梅壺は、その固定的イメージが比較的希薄であるために、後宮の居所としても一定ではない。『海人の刈藻』『風につれなき』『恋路ゆかしき大将』などの例は、後宮の場のひとつとしての梅壺であり、さらに梅壺女御が理想的な女性ばかりとも限らず、『苔の衣』には、近寄りがたい女御という人物造型になってもいる。

中世物語における梅壺は、『源氏物語』のイメージを強く引きずる桐壺や藤壺などとは異なり、それぞれの作品の事情にそう場として設定されている。東宮の支配空間という印象も希薄であり、入内した女性の居所としての描かれ方も、『源氏物語』の梅壺を必ずしも呼び起こすわけではない。『源氏物語』の桐壺と混同するような表現が、一例のみならず複数みられるところに、中世物語における梅壺のありようがうかがえる。むしろ、用例の少ない梨壺の方が、東宮の印象は強いようである<sup>(26)</sup>。それは、『源氏物語』の梅壺が立后する女御の居所として描かれ、物語内事実として長期にわたって使用されていながら、女御の通称が「秋好中宮」とかわり、梅壺の印象が物語の表世界から遠のいたことが大きいと思われる。また、匂宮巻の叙述は、第三部の始まりの紹介の一部として、見過ごされがちだったという事情も関係していよう。特定の

イメージの呪縛が薄いだけに、中世物語においては、かえってさまざまな後宮の場として描かれ、物語空間としての多様なあり方が開かれたと考えられる。

## 注

- (1) 拙稿「御局「桐壺」考」「跡見学園女子大学国文学科報」(二〇〇一年三月)および『源氏物語』にみる場としての「藤壺」「源氏研究」(翰林書房 二〇〇二年四月)。
- (2) 陽明叢書 記録文書篇 別輯『宮城図』(思文閣出版 一九九六年)、故実叢書所収『大内裏図考証』。
- (3) 村井康彦『平安貴族の世界』(徳間書店 一九六八年)、橋本義彦「里内裏沿革考」『平安時代の歴史と文学 歴史篇』(吉川弘文館 一九八一年)、『平安京提要』(角川書店)など。
- (4) 増田繁夫「弘徽殿と藤壺―源氏物語の後宮―」『国語と国文学』(一九八四年十一月)、同「源氏物語の後宮―桐壺・藤壺・弘徽殿―」『源氏物語の鑑賞と基礎知識 1 桐壺』(至文堂 一九八八年一〇月)、同「女御・更衣・御息所の呼称」(初出『平安時代の歴史と文学・文学編』吉川弘文館一九八一年)「源氏物語の藤壺は令制の〈妃〉か」(初出『人文研究』一九九一年二月)『源氏物語と貴族社会』(吉川弘文館 二〇〇二年)所収、など。
- (5) (2)『宮城図』による。
- (6) 「凝華」は『文華秀麗集』「和滋内史秋月歌。一首。桑腹赤」に、「凝華遙裔白雲倪」とあり、華やかな月の光が遙かに白雲のたちこめたあたりに照る、という句に月の光を表す語としてみられる。「淑景」については、(1)「御局「桐壺」考」参照。
- (7) たとえば『文華秀麗集』「婕好怨。一首。御製」では、「昭陽辞御寵 長信 独離居」とあり、漢の成帝に愛された班婕妤が趙飛燕に寵愛を奪われて退いた話を素材に、その怨情を詩にしている。そこで、班婕妤が住んでいたのが昭陽舎であった。続く「奉和婕好怨。一首。巨識人」「奉和婕好怨。一首。桑腹赤」、(6)の「和滋内史秋月歌。一首。桑腹赤」にもみられる。
- (8) 勉強社文庫『倭名類聚抄』(元和三年古活字版 二十卷本)の「巻第十」には、「襲芳舎」として「在凝華舎北 加美奈利之豆保 以霹靂俗謂之雷鳴壺」とある。
- (9) 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)による。他の物語の引用も同じ。
- (10) 常磐井和子『源氏物語古系図の研究』(笠間書院 一九七三年)。
- (11) (8)『倭名類聚抄』。
- (12) 山下克明「平安時代初期における『東宮』とその所在地について」『古代文化』一九八一年二月)。
- (13) 『西宮記』巻一、二宮大饗所引『李部王記』延長三年正月二日の東宮大饗は職曹司で行われている。『日本紀略』延長三年六月十九日条には「皇太子慶頼王薨于職曹司」と記す。
- (14) 諸記録の引用は『大日本古記録』『国史大系』『史料大成』『故実叢書』による。
- (15) 『醍醐天皇御記』延長三年十月廿一日条に「申剋王卿就洪輝殿東方令啓慶

由。即於凝華舎給饗祿云々。太子幼稚不可別処。仍有定。令居宮同殿之」とある。「洪輝殿」は弘徽殿とみられ、ここから凝華舎が用いられていることも知られる。

(16) (12) 山下論文参照。『日本紀略』延長元年三月廿一日条に「依皇太子臥病。大赦天下。子刻。皇太子保明親王薨。年廿一。天下庶人莫不悲泣。其声如雷。举世云。昔帥靈魂宿忿所為也」とある。

(17) 『日本紀略』「冷泉院 踐祚前抄記」の「十月二十二日丙辰。入桂芳坊」。

(18) 参考までに、以後の、凝華舎の例もあげておく。

\* 東宮自南院第入禁中凝華舎。

『日本紀略』花山院 踐祚前抄記 永觀二(九八七)年八月廿七日  
\* 天皇即位於大極殿。今夜。東宮自一条院遷御凝華舎。中宮遷御枇杷殿。

『日本紀略』寛弘八(一〇二一)年十月十六日条

\* 天皇與太后同輿。遷幸新造内裏。東宮遷坐凝華舎。

『日本紀略』寛仁二(一〇一八)年四月廿八日条

敦成親王(後一条帝)の東宮時代にも凝華舎を用いており、敦良親王(後朱雀帝)の東宮時代には、内裏が新造され凝華舎に移っている。

(19) (1) 拙稿参照。

(20) (1) 『源氏物語』にみる場としての「藤壺」参照。『九曆逸文』天慶九年十月廿八日条、『貞信公記抄』天曆二年一月廿七日条。

(21) 天曆七年十月、きさいの宮の御方に菊うゑさせたまひける日、うへの

男ども歌つかうまつりけるついでに

天曆御製

心して霜のをきける菊の花千世にかはらぬ色とこそ見れ

『続後撰和歌集』卷二十・賀 一三四六  
『扶桑略記』天曆八年正月四日条には「太皇太后藤原穩子於昭陽舎崩、年七十焉」とある。

(22) 藤岡忠美「後撰集の構造―その三・梨壺、その女性的契機」『平安和歌史論』(桜楓社 一九八六年)。

(23) 『栄花物語』「月の宴」にその様子が描かれる。昭陽舎の名は『撰集秘記』

「親王於禁中行嫁礼事」に「康保三年十月廿五日御記云此夜上野太守親王於昭陽舎宿廬娶右大臣息女於禁中行婚礼頗雖無便予在藩之時天慶年中於飛香舎納故中納言依有蹤跡殊許之」(国書逸文研究会 一九八〇年)と記される。

(24) 『日本紀略』長元五年十一月十三日条、『扶桑略記』延久三年十月十三日条など。

(25) 引用した以外の用例を列挙しておく。本文は鎌倉時代物語集成により、表記は、適宜、私に改めた。

\* 「春宮には、梅壺の女御の御母、藤大納言の北の方、心むくつけき人にて、

『海人の刈藻』卷一

\* 梅壺の御いもうとの中君、十四、五にものしたまふが、

『海人の刈藻』卷三

\* 梅壺をぞたまかゞみとみがきて、

『いはでしのぶ』卷一

\* 梅壺に中納言の更衣ときこゆるは藤中納言の姫君、かたちをかしといはれたまひけり。

\*琵琶ひきたまふは、梅壺なんめり。

『風につれなき物語』上

\*上に参りたまへば、梅壺におはしますほどにて、

『夢の通ひ路物語』巻六

\*さても梅壺は、御心もそらに、たよりをのみまちたまふに、

『風に紅葉』巻一

(26) 梨壺の用例は次のとおりである。  
これらについては、稿を改めて再検討することにした。

『風に紅葉』巻一

\*東宮は梨壺におはしませば、御局は宣耀殿にせられたり。

\*師走に梅壺の女御、后にたちたまひて、中宮ときこゆ。

『風に紅葉』巻二

\*御物忌かたうて梨壺にもまうのぼりたまはぬ夜、入りにけり。

『とりかへばや』巻一

\*右大将殿の女御、梅壺とてさぶらひたまふ、年ごろになりたまふが、なまめかしく、あくまでしなやかにおはすれど、いかにぞや、けぢかきさまにはものしたまはず。

『苔の衣』春

\*御悩みにことづけて、梨壺に渡らせたまはんとおぼさる。

『とりかへばや』巻四

\*御はゝかたも、梅壺の女御とて、ふるき大臣の御むすめ、

『恋路ゆかしき大将』巻一

\*梨壺の更衣の御腹にも姫宮なんひとかたおはしけり。

『夢の通ひ路物語』巻一

\*梅壺の女御とてさぶらひたまふ。

『恋路ゆかしき大将』巻二

\*東宮は内の大殿の姫君、梨壺ときこゆ。

『夜寝覚物語』巻五

\*梅壺の事も思ひやらるゝにも、

『小夜衣』中

\*梅壺の方も、今はうらめしくおぼされながら、

『小夜衣』下

\*九月十五日、月いとあかきに、御あそびにさぶらひて、御とのみなる夜、梅壺の女御のまうのぼりたまふを、

『とりかへばや』巻一